

SDN による QoS を考慮した IoT 通信制御手法

A Method of SDN Based QoS Aware IoT Communication Management

国本 典晟 / Tensei Kunimoto

1 はじめに

近年、画像や動画などの大容量データの需要が急速に拡大したことによるインターネット全体の帯域の逼迫が問題になっているが、IoT デバイスの増加とスマートホームの技術の進歩に伴い、ホームネットワーク内部の帯域並びにホームネットワーク外部のインターネットの帯域の逼迫はより深刻化すると予想される。現在、ISP (Internet Service Provider) は各家庭の総帯域を契約した帯域の範囲内で制御しており、要求される帯域が回線の帯域を上回る場合、特定アプリケーションやユーザの帯域を制御することでネットワークの品質確保に努めている [1]。しかし、そういった帯域制御は多様なサービスやトラフィックに最適化されたものではなく、IoT デバイスが要求する複数の QoS 要件を満たすことができない。

この問題の解決を目指して、IoT デバイスのサービスカテゴリごとに適切な帯域を割り当てる管理アーキテクチャが提案されているが、複数の QoS 要件を満たすためのアルゴリズムが課題になっている。本研究では、アプリケーションの使用頻度を考慮した IoT デバイス管理アーキテクチャの実装と評価を行う。

2 関連研究

2.1 SDN ベースの QoS を考慮した帯域管理フレームワーク

Jang らは、スマートホームのネットワークデバイスのための革新的なネットワーク管理モデルを開発する必要があるとして、SDN ベースの QoS を考慮した帯域管理フレームワークを提案した [2]。この研究では、QCI (3GPP LTE QoS Class Identifier) をスマートホーム向けのサービス用に表 1 のように再定義し、QCI サービスをパケット遅延の上限値に基づいて「高優先度クラス」「中優先度クラス」「低優先度クラス」の 3 つに分類することで各サービスの QoS の最適化を目指した。実験の結果、従来の ISP の帯域制御手法を上回る結果を得た。

2.2 AQRA

Deng らは、Jang らが提案したスマートホーム向けに再定義した QCI を利用して、AQRA (Application-aware QoS Routing Algorithm) を提案した。[3]AQRA では、複数の QoS 要件を満たすフローの最適な経路の選択を SA アルゴ

表 1 スマートホームサービス向けに再定義された QCI

QCI	Priority	Device type	Resource Type	Packet Delay Budget	Packet Error Loss	Example Services
1	2	Non-M2M	GBR	100ms	10^{-2}	Conversational voice
2	3	Non-M2M	GBR	50ms	10^{-3}	Real time gaming
3	4	Non-M2M	GBR	150ms	10^{-3}	Conversational video
4	5	Non-M2M	GBR	300ms	10^{-6}	Non-conversational video (Buffered streaming)
5	1	M2M	Non-GBR	60ms	10^{-6}	Mission critical delay sensitive data transfer
6	6	Non-M2M	Non-GBR	300ms	10^{-6}	Video (Buffered streaming) TCP-based (for example, www, email, chat, ftp, p2p and the like)
7	7	Non-M2M	Non-GBR	100ms	10^{-3}	Voice, Video (Live streaming), Interactive gaming
8	8	M2M	Non-GBR	N/A	10^{-6}	Non mission critical delay insensitive data transfer

リズムにより行った。また、高優先度クラスに属するアプリケーションの QoS 要件の不満足を防ぐために、QoS を考慮したアドミッション制御を提案した。実験の結果、QoS を考慮したアドミッション制御を行った AQRA は、行わなかった AQRA と比較して高優先度クラスに属するアプリケーションの QoS の適合率は向上した一方で、中優先度クラス及び低優先度クラスに属するアプリケーションの QoS の適合率は低下した。

3 提案手法

3.1 概要

これまで提案された帯域管理システムでは、QCI のリソースタイプのに応じてアプリケーションを「高優先度クラス」「中優先度クラス」「低優先度クラス」の 3 つのクラスに分類していた。高優先度クラスに属するのはガスセンサや侵入者アラームなどの非リアルタイムかつ遅延の許されないアプリケーションであり、中優先度クラスに属するのは映像データや音声データなど、遅延制限が厳しいリアルタイムサービスのアプリケーションである、低優先度クラスの属するのは遅延の許されるアプリケーションである。高優先度クラスに属するアプリケーションは必要時には十分な帯域が確保されるべきであるが、スマートホーム



図1 悩む男の子

のユーザの使用頻度は中優先度クラス及び低優先度クラスのアプリケーションの方が高く、常に高優先度クラスのアプリケーションのために中優先度クラス及び低優先度クラスの帯域が犠牲になるのは QoE を著しく損なう。本研究では、[3] で提案された QoS を考慮したアドミSSION制御の見直しを行うとともに、アプリケーションの動作状態に応じてアドミSSION制御の切り替えを行い、ユーザのアプリケーションの使用頻度を考慮した通信制御を行う。

3.2 前提条件

前提条件は以下の通りである。

-

本研究で想定するアーキテクチャを図1に示す。

3.3 動作手順

1. 書かれた論文は書いた人の研究者としての人格を表す
2. データのみ出して論文を書かない者は、テクニシャンである
3. データも出さず、論文（原著論文）を書かない者は、評論家である

4 評価

4.1 評価方法

本研究で提案する帯域管理システムは QoS が向上することを目的とするため、評価は平均転送率、平均ジッタ、平均遅延時間の測定により行う。その際、高優先度クラスのアプリケーションのサービスが必要となった時は高優先度クラスのアプリケーションの QoS 要件を保証するが、平常時はアプリケーションの使用頻度を考慮して、中優先度クラス及び低優先度クラスの QoS 要件を保証できているかを評価する。また、提案システムが膨大な数のスマート

ホームの管理を行った際に目的の通り QoS を保証できるかを確認するため、システムが管理するスマートホームと IoT デバイスの数が増加した場合の平均転送率、平均ジッタ、平均遅延時間の変化を評価する。

4.2 評価環境

評価環境を以下に示す。

- SDN コントローラには OpenDaylight Neon を使用する
- IoT デバイスは 30 台～100 台で変化させる
- 高優先度クラスのフローは 30 %とする
- 中優先度クラスのフローは 40 %とする
- 低優先度クラスのフローは 30 %とする

5 まとめと今後の課題

本研究では、[3] で提案された QoS を考慮したアドミSSION制御の見直しと切り替えを行うことで、アプリケーションの使用頻度を考慮した通信制御を行い、帯域の効率的な活用及びスマートホームのサービスの複数の QoS 要件の満足を目指す。

今後の課題として、QoS を考慮したアドミSSION制御の具体的な改善案や、アドミSSION制御の切り替えの基準を考える必要がある。

参考文献

- [1] 総務省、帯域制御の運用基準に関するガイドライン（改定）、2019.
- [2] Hung-Chin Jang and Jian-Ting Lin, SDN Based QoS Aware Bandwidth Management Framework of ISP for Smart Homes, 2017 IEEE SmartWorld/SCALCOM/UIC/CBDCOM/IOP/SCI, 2017/8
- [3] Guo-Cin Deng and Kuochen Wang, An Application-aware QoS Routing Algorithm for SDN-based IoT Networking, 2018 IEEE ISCC, p186-191, 2018/6